

## 不登校をやっつける!

第5回

## 親子奮戦記

名和隆子  
(塾講師)

## クラスメイトたち

●前回までのあらすじ

小学校3年生の頃、子どもが学校に行かなくなり、私は中学校講師の仕事を辞め、親子で「子どもの心のクリニック」に通い始めました。そして4年生になり、ベテランの教師S先生と出会ったことで、子どもは少しずつ学校に通い始めました。

## 団体演技を前向きに完遂

2学期がスタートしました。学校が運動会一色に塗りつぶされ、「ますます登校から遠ざかるだろう」という私の予測を裏切り、なんと運動会に前向きな気持ちになっていました。S先生は洋平に限らず、だからといい加減な練習をしている子には徹底的にはつばをかけ、叱り、またそういう子が頑張ればしっかりと認めていく、というやり方で、クラスの気持ちをはひとつにまとめていました。洋平もその気になって熱心にソーラン節を練習し、欠席は週に1〜2回、休んだ分も放課後に残って練習していました。そして運動会当日、他の子と同じようにみごと踊りきり、本人も久々に充実感と連帯感を味わったようでした。

## クラスの子ども達が大勢で……

しかし運動会の次の日から、早速の欠席です。洋平を残して出社し、四時過ぎに家のすぐ近くまで帰ると、我が家のあるマンションの五階付近から、大勢の小学生のはしゃぎまわる声が響いてきました。「?」と思いつつ階段を上っていくと、男子女子入り乱れて20人近い子どもが家の中や、ベランダを走り回っています。きゃあきゃあ叫び、ぐるぐる回るその輪の中に

洋平も……。

聞くと、学校の休み時間に先生が「洋平の家に迎えにいくけど、一緒に行く人は?」と有志を募ったところ、20人くらいが「よし、みんなで行こう」と、連れ立って我が家へ来たのだとか。しかし、洋平は居留守です。先生は玄関ドアを叩き、クラスの子達も「みんなで来たのに隠れたままか?」「ともかく開けてよ!」と口々に叫ぶも反応なし。その時は帰ったものの、昼休み、放課後と、違うメンバーで入れかわり立ちかわり来てくれたそうなのです。それでも居留守を続ける洋平に、一番の仲良しH君が、半泣きになりながら「洋平のバカ、みんながどれだけ心配してると思ってる。お前、いい加減にしろ、俺はもう知らんぞ。」と叫んだとたん、ドアが開いて「ごめん」と洋平が顔を出したのです。その瞬間、H君の後ろにいた20人がどつと家の中になだれ込み、追いかけてこになったその現場を、私が目撃したのでした。

クラスの子達は「学校休んだら毎日こうしてみんなで押しかけるから、そのつもりでいろよ。」と言い残し、帰って行きました。その中にいた、優しく物静かな感じのK君が、「僕、明日から毎朝、洋平のこと迎えにきます。」と小さな声で私に耳打ちしてくれました。後でわかったことですが、これは誰に言われたのでもない、K君が一人で考え一人で決めたことでした。

(つづく)